

10) F. W イーストレーキの業績

The Achievements of W. D Eastlake

日本歯科大学 新藤恵久

Yoshihisa Sindou, *Nihon Dental College*

日本人が米国の歯科用機械のカタログを眼にしたのは、明治8年竹沢国三郎と契約し築地入船町で開業したアレキサンドルから借りたものが最初である。また、欧米の歯科学術書入手、翻訳が行われたのは明治14年ごろとされる。これは、日本での歯科医業を目的に来日した米人が、開業を断念して寄席芸人となった。彼は持参した歯科書籍、器材など一切を渡辺良斎に売却、これを良斎は苦心して翻訳したという。学術的な近代歯科を日本人が初めて知ったのはこの頃である。

W. C イーストレーキが正規の歯科医師となって再々来日、横浜で開業したのは明治14年、子息の Frank WARRINGTON Eastlake (1858-1905) の来日は明治16年である。

W. C イーストレーキの生活の様子は、子息と親交があった杉村廣太郎の「イーストレーキ夫人を弔う 涙骨」の一部から窺われる。

「盛んなる時はベルリン王侯貴紳の交際世界の女王と謡はれ、衰ふる時は根津の橋居に困乏病苦と闘ひ」(明治29年1月15日 国民新聞)

また、F. W イーストレーキのもとに数年間寝起きしていた演者の親族からの話からも W. C イーストレーキの最初の来日の目的が、当時の外人歯科医? らのそれと変わらなかったという。(「イーストレーキと日本の青年」イーストレーキ・ナヲミ著「憶ひ出の博言博士」昭和11年刊)。

今回は詳細については避けるが、W. C イーストレーキが日本の歯科の最初の功労者との説には疑問点が多。

一方、明治16年来日した子息の博言博士のわが国への貢献はあまりにも著名である。

彼は来日の翌年から英語の学習に横浜の彼のもとに通っていた太田ナヲミと結婚、番町に居を構えた。ここで著作や翻訳などを手掛け、英字新聞(名義は日本人)を発刊した。また、当時は英語の語学校はほとんど無く、そこで神田に初めての外人による英語学校「国民英学会」を主催した。当時は、外人経営の名目は許されなかったため、内弟子の磯辺弥一郎を表向きの代表とした。ところが事業は磯辺の背任により、彼は経営より手を引くこととなった。

しばらくして、当時の英学界の権威であった藤秀三郎の懇望により「正則英語学校」を開校した。入学希望者は増加する一方、まさに門前市をなすの勢いで増築に次ぐ増築という盛況であったという。

このころ彼が山田寅之助とともに精根を傾けて書きあげたのが『HEROIC JAPAN』であった。

明治37年日露戦争が勃発、日本は国際世論に反して次々と戦果を挙げていった。翌年、奉天で勝利を収めた日本は、和平交渉の仲介をアメリカ合衆国第26代大統領 Theodore Roosevelt に依頼した。この時の特命全権大使・小村寿太郎が持参したのが、新渡戸稲造の著『BUSHIDO THE SOUL of JAPAN』と『HEROIC JAPAN』であった。これを読んだ大統領は感動し、彼の尽力で日露講和が成立した。

日本中が戦勝に沸いているなか、イーストレーキは肺炎となった。戦傷者で東京の病院はどこも満員、ようやく入院できたものの、すでに手遅れであった。